

## 22.子どもの貧困対策：親への支援と子ども食堂

清水優花

はじめに

近年、社会問題として注目されつつある子どもの貧困は果たして本当に「子ども」の貧困なのだろうか。貧困に悩まされる子どもは自身でお金を稼ぐことは難しいため、親の収入が生活資金となる。親の収入が少なく、家庭が貧困となればその子どもも貧困となってしまう。それでは「子ども」の貧困は「親」の貧困ということとなり、親が子どもを貧困にさせる大きな要因なのではないか。このレポートでは子どもの貧困の原因は親にあるとした視点から子どもの貧困対策の糸口を探っていく。

まず、子どもの貧困の現状を学ぶ上で読んだ文献には「子どもの貧困問題の先駆者である阿部彩氏は勤務先の上司に『“子ども”と“貧困”を同じ文書の中で使うな。国民に誤解を与える』などと赤ペンを入れられていた」「子どもの貧困は2008年ごろから急速に社会問題として認識されるようになった」（武川正吾「いまなぜ、子どもの貧困か」）などとあった。これには衝撃を受けた。そもそも、子どもの貧困は親の影響であると考えているため、阿部彩氏の上司と同じく“子ども”と“貧困”というワードは結びついていなかった。しかし、現状はこの認識とは異なり、課外活動などの機会による差、学校教育の差、幼児期の発達の差、コミュニティの差など様々な要因が絡み合っておこっていた。まさに“子どもの”貧困である。

特に課外活動による機会の差は顕著に現れていると感じた。ロバート・D・パットナム氏は著書『われらの子ども』で「課外活動への参加は測定可能なほどの好ましい結果をもたらす」と述べている。このような活動は子どもの自信となるうえ、チームワークやリーダーシップが養われる。ここで身に着けたスキルは将来の賃金や職業的達成に大きく影響し、貧困問題を解決する手立てとなり得るだろう。

だが、塾やピアノのレッスン、サッカークラブなどの課外活動に参加するには決して安くはないお金が必要となる。そもそも親に月謝が払えるような収入が無ければ課外活動に参加することさえできない。課外活動による機会が子どもにとって良い経験となることがわかっているのに、それに参加できないのであれば話にならない。ここまで子どもの貧困に関する文献や研究資料を読んで、この社会現象にはさまざまな要因があることを学んだが、やはり親による影響が子どもの貧困問題の一番の障害となっているのではないか。逆に言えば、親による影響を改善することが子どもの貧困問題の解消につながるだろう。今回はこのような親への支援について重点的に調べ、この社会問題へどのような変化をもたらすことができるのか考えていく。

### 一章 親の所得の格差による貧困・・・親への支援

先ほど述べた親への支援として子どもの貧困対策の講演会を開催しても、聞いてほしい、来てほしい人は参加せず、思うように機能していないと聞く。12月26日の「子どもが輝く未来に向けたシンポジウム」へ参加した際、パネリストの愛知県立城北つばさ高等学校教頭の鳴澤由紀子氏が「生徒の保護者に貧困対策の情報を提供しても悩めない」と述べていた。支援をしようとして学校側からも手を差し伸べても、すでに貧困から逃れることを諦めていて必要な手続きをしてくれない、考えようともしないとのことだった。このような親の意識は

なぜ生まれてしまうのか。他の裕福な家庭との差は何なのだろうか。以下にその差について調べたものをまとめていく。

子どもの貧困問題の要因の一つとして親の学歴の差からおこる階級格差がある。この学歴の差が生み出す格差は子どもの育児への姿勢に影響を与え、子どもの将来を大きく左右していることがわかった。親の育児について書かれた文献には「育児規範において広範な階級差があることが、ほとんどすべての研究において現れている。すなわち教育水準の高い親の方は、自立的で独立した、自発的な子育てを目指しているのに対し、教育水準の低い親はしつけおよびあらかじめ決められているルールに服従することを重視している」（ロバート・D・パットナム『われらの子ども』）との記述もある。

図 1 は教育水準の差異を明確に表している。高卒未満の学歴である親の従順さを指示する

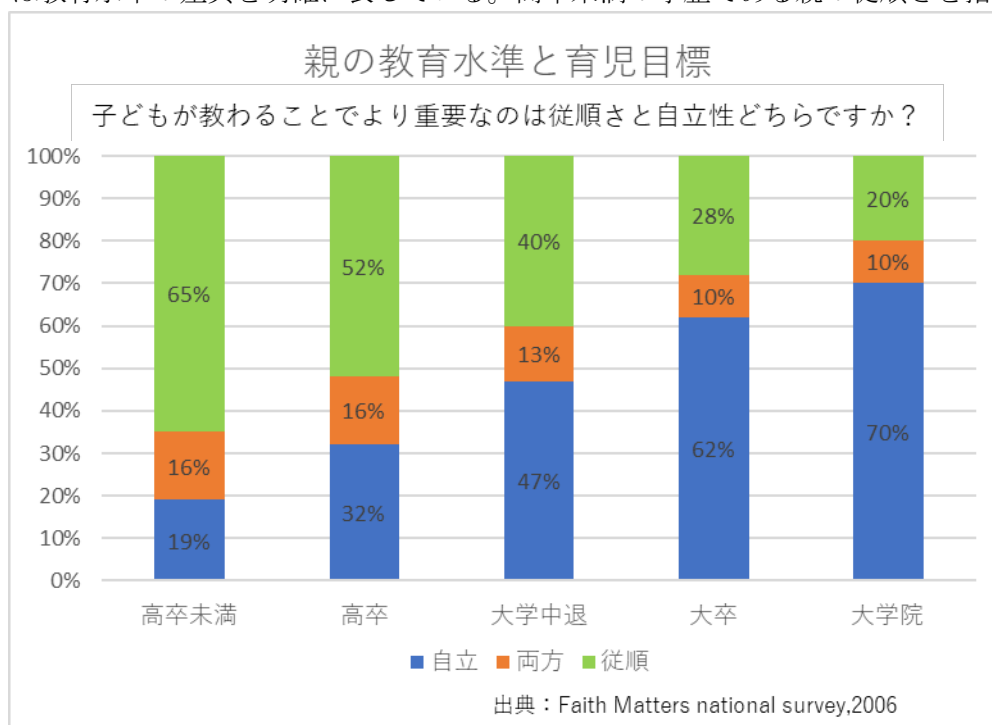


図 1

割合は 65%、自立性を指示する割合は 19%。対して最終学歴が大学院である親の従順さを指示する割合は 20%、自立性を指示する割合は 70%と見事に反比例している。上層階級の親は子どもの社会的能力を伸ばし、しつける際には理由付けや子どもと話し合う傾向にあるが、下層階級の親はルールやしつけに固執してしまい、子どもをしつけるために叩くなどの体罰を用いることが多い。この凝り固まった考え方が子どもの将来に悪影響を及ぼしている。先に述べた鳴澤由紀子氏の「悩めない親たち」の話はこの教育水準の差異と通ずるものがあるのではないかと。学歴が低いからこそ、子どもの貧困対策の支援を進められてもその政策内容を理解できず、諦めてしまい、自分の手でなんとかしようとして子どもに従順さを求めてしまう。しかし、従順さを求めるあまり子どもの行動や考え方を制限してしまうと子どもの成長の妨げとなり貧困のリスクをより高める結果となる。

この貧困の負の連鎖を断ち切るためには親への支援が必要不可欠で、子どもの貧困問題解消を第一課題で取り組まないといけない。政府の子ども貧困対策の推進に関する対策でも保護者に対する就労の支援が掲げられている。

世帯収入	正答率 (%)			
	国語A	国語B	算数A	算数B
200万円未満	53.0	39.0	67.2	45.7
200万円～300万円	56.8	42.7	70.4	50.8
300万円～400万円	58.4	45.0	73.6	53.3
400万円～500万円	60.6	47.0	75.1	56.2
500万円～600万円	62.7	48.8	77.6	57.9
600万円～700万円	64.8	52.5	80.1	61.3
700万円～800万円	64.9	52.4	79.7	62.2
800万円～900万円	69.6	57.6	83.2	66.0
900万円～1000万円	69.3	55.1	82.7	66.4
1000万円～1200万円	69.6	55.5	83.9	67.9
1200万円～1500万円	70.8	59.4	84.5	67.1
1500万円以上	75.5	61.5	85.6	71.5

※出典：  
お茶の水女子大学「平成25年度 全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」

図 2

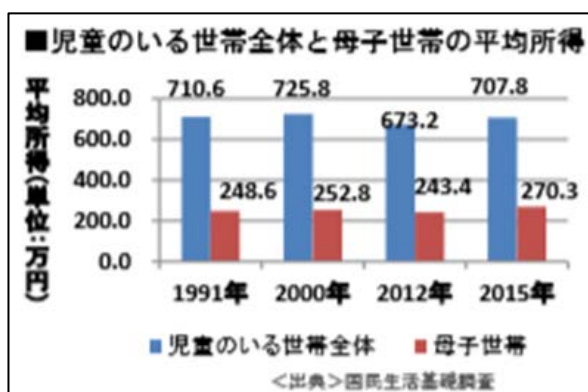


図 3

政府が現金を支給するのだ。最近では、ベーシック・インカムという所得保障制度が注目を浴びている。ベーシック・インカムとは、政府が国民の生活を最低限保証するため、年齢・性別に関係なく一律で現金を給付する仕組みのことである。しかし、これはベーシック・インカムに限った事ではないが、現金給付には政府から受けた現金支給をパチンコなどのギャンブルで無駄に浪費してしまうことや、政府から支給される現金だけを頼りにし、働かなくなるかもしれないというデメリットがある。家計支援の要となる現金給付は「人」の善し悪

も保護者に対する就労の支援が掲げられている。

左の図 2 (出典：お茶の水大学「平成 25 年度全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」)は世帯収入に対する子どもの国語と算数のテストの正答率の関係を表している。世帯収入が 200 万円未満である家庭の子どもの正答率は国語 A で 53%、国語 B で 39%、算数 A で 67.2%、算数 B で 45.7%ある。それに対し、この中で最も高い年収の 1500 万円以上の家庭の子どもの正答率は国語 A で 75.5%、国語 B で 61.5%、算数 A で 85.6%、算数 B で 71.5%と約二倍の差が見られた。

また、図 3 (出典：国民生活基礎調査)は児童のいる世帯全体と母子世帯の平均所得を示している。児童のいる世帯全体と比べ、母子世帯の平均所得は三分の一ほどであり、大きな所得格差がある。それに加え、母子世帯は年々増加している傾向にあり、格差は開く一方だ。

以上のことから、親の収入と子どもの学力には明確な関係があることがわかった。世帯収入が多いほど子どもの学力も上昇し、逆に収入が少ないほど子どもの学力は低くなる。中でも、母子世帯は特に収入が少なく、子どもの学力向上に対して悪影響を及ぼしている。

この収入格差による子どもの貧困対策には現金給付が一番手っ取り早いと考える。稼ぎが少なく、家計が苦しい世帯に政府

しや「どのようなサービス(モノ)か」に左右されず手にできる半面、支給された手当をその後どのように賢く選択し利用できるか分からないという不安があり、完璧な貧困対策とはなり得ない。ベーシック・インカムという制度がなかなか導入されない理由もこのようなデメリットが沢山ある為である。親の働く気の有無、子にお金をかけられない状態、親サイドの支援を待っている子ども達が貧困状態のまま育っていき、結局「貧困の負の連鎖」は止められないのではと考える。親への支援で子どもの貧困を救えないのならば、子ども自身に支援をする方法はどうか。次章では子どもへの支援による貧困問題解消の可能性、特に学習支援について考える。

## 二章 子どもの学習支援

子どもへの教育投資には膨大な資金が必要となり、これは家計を圧迫する大きな要因となる。貧困であればなおさらだ。貧困家庭では生活費を稼ぐのに精いっぱい生活に余裕が無く、子どもの面倒や世話もままならず、教育面は後回しになっているのではないかと推測できる。長い目で見たら大学進学は子どもの将来の選択肢を広げることにつながり、「貧困の負の連鎖」を食い止められる可能性がある。一章でも述べたように、学歴によって教育水準に差が生まれ、親の収入格差によって子どものテストの正答率に差が出たりと、学力の差は子どもの貧困にとって影響力が大きい。子どもの学力を向上させることができたのならば、大学に進学する確率も上がり、やがて安定した収入が手に入る職につけ、子どもの貧困の解決につながる。そのため、子どもへの学習支援が早急に必要であると考えられる。

一章でも述べたが、親の所得格差は子の成績に直結している事が多い。塾やその他の習い事をやらせられない事も理由のひとつだろう。図4は図2の表をグラフで表したものである。



図 4

る。困窮家庭と高収入の家庭では20点もの差があり、高収入の家庭では子どもの塾などにお金をかけているだろう事が想像できる。日本版総合的社会調査(JGSS)では15歳時点での家庭の経済状況が成人となつてからの経済状況に関連があると示している。すなわち子ども期の貧困の経験はその子どもが大人になつてからも学歴、雇用状況、収入、犯罪歴などに関係する。特に乳幼児期の貧困は子どもの将来に大きな影響を及ぼす事があらゆる研究で分かっている。子どもの貧困はその責任を当事者である子どもにはない。子どもの貧困に対

する対策は早期段階における介入が効果的である。

どんな介入政策が効果を持続させられるかということについてヘックマン氏の考えが腑に落ちた。

「乳幼児期に貧困の子どもに対して大々的な支援をすればその後の中学校、高校といった学齢期にはそれほど支援がいらなくなる。介入政策の効果の期待に就学前の支援により問題行動や学力に改善がみられたのであれば小学校に入っても先生から問題児扱いされず、子どもと教師の関係も改善する」(阿部彩「子どもの貧困Ⅱ」－解決策を考える－)

このようにある程度、乳幼児期から支援し続ければ子どもの貧困格差の改善となる。例えば保育士が貧困世帯の陥りやすい栄養不足の子どもを見て気づく事の出来るスキル、親も気づかない発達障害に気付けるスキルを持つ教師など、親だけでなく、その子どもの人生に家族以外の周りの人間が介入し、支え合える状況などが理想だろう。子どもの生活が改善されれば今よりは豊かな未来が開けるはず。そこでキャリアアップし、自らの人生を自分の手で切り開いていくといい。それでも改善されない子どもには発達障害、知的障害を疑い、早期発見、早期治療につなげることができたなら、適切な教育が受けられる。そこで見逃した場合、そのまま成人し、障がいがある理由で就職が続かない、見つからないなどの貧困の連鎖につながる。学習支援をしつつ一人一人に向き合うことができればその子の将来を見据えた支援が可能になるのではないだろうか。特に乳幼児期、せめて小学校でその子のフォローが出来たら学力格差による貧困の連鎖から解放される。

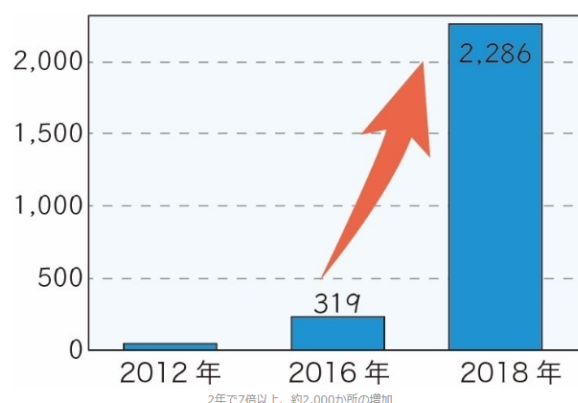
乳幼児期で見過ごされてもジョブ・コープ制度に貧困対策の糸口をみつけるクルーガー氏は青年期でも遅くはないと唱えている。(阿部彩「子どもの貧困Ⅱ」－解決策を考える－)

ヘックマン氏の考えとクルーガー氏の考えに日本ならではの民間と行政の介入をすれば救える子どもが増えるのではないか。個人情報の開示などの問題もあるが子どもの貧困対策に関しては一部、地域に開示し地域で支える、地域で見守る、そこに行政のフォローが入るというやり方が望ましいのではないかと考える。地域で子どもを支えるその第一歩として子ども食堂が存在する。子ども食堂は家庭で満足な食事ができない子どもや、家または学校に居場所のない子どもにとっての「安心できる場所」としての機能をもっている。しかし、中にはそれらだけでなく、子ども食堂で学習支援を行っている団体もあり、その活動の場は多岐にわたっている。このような子ども食堂もまた子どもの貧困対策の糸口となるのではないか。次章ではそのことについて注目し、子どもの貧困対策について論じていく。

### 三章 子ども食堂の意味

実際、何人の人が支援を必要としている子どもがいることに気付いているのだろうか。参考文献にもあったが、子どもにとって家族の次に身近である保育士・教師でも知らないのではないか。そこで子ども教育のプロである人にも周知徹底する必要がある。

子ども食堂とは放課後に子ども達が安全・安心に過ごせる場を提供し、場所によっては本やおもちゃがおいてある。そこで自由に子どもを遊ばせるための施設である。現在では子ども食堂に関心が多く集まり、その数も増えている（図5）。



子ども食堂安心・安全向上委員会が実施

図 5

しかし、この子どもの居場所づくりに関して思うことがある。どこの施設も子ども達が集まってゲーム機に夢中なのである。何千円もするソフトを何枚もケースに入れて持っている子など、お金に困っているようには見えない子どもが多く見受けられる。そんな子どもの為の居場所に生活困窮の家庭の子が来られるだろうか。居場所の無い子をつくってしまう事業にはならないか、いわゆる放課後格差の一因にならないかと心配する。

放課後の子ども達の過ごし方では非貧困家庭は習い事にあてる事が多い中、貧困家庭ではそれはかなわない。放置され家の中でゲームやテレビを見て過ごす。このような格差が非行等の問題行動の増加、学力の低下、体力の低下につながるのである。

愛知県高浜市ではそんな格差解消のために放課後や土日祝に場所を開放し貧困家庭や事情のある子(障がい等)を専門のスタッフが勉強を教えている事業がある。ここに参加できる子は学校と家庭と行政機関で選ばれて来ているようだ。時には地域の人と工作をしたりして、人とのふれあいを体験し、あとは専門スタッフ達と勉強をしている。落ちこぼれがちであきらめがちな子ども達をぎりぎり支えなんとか踏ん張らせている。子どもの貧困対策とは地域全体で協力して断ち切るものだと改めて気づいた。

身近には貧困の子どもは見当たらないと思っている人が多く存在すると思うが、それは見えない、または見えづらいただけかもしれない。学級担任や保育士に気付いてもらう、また、社会福祉協議会など行政の手が入らないと民間では気づけないほど、近年では近所付き合いが希薄になってしまった。子どもが家で餓死していたなどの悲惨なニュースでも問題として取り上げられるのは、行政が問題の対象の家に尋ねても保護者が面会しない場合があり、対応が遅れてしまっていることである。せめて回りが気付いてあげられないのかと思うが、地域のコミュニティが希薄である現代では難しい。家庭外での子どもの面倒は教育の現場に頼りがちとなり、先生任せの現状である。行政だけでは、また教育の現場でも問題は山積みであるため、地域での貧困対策が早急に必要である。

学習支援だけ進んでも「腹が減っては戦が出来ぬ」という通り、食事ができない子も緊急

に救わなければならない。飽食の時代と言われる現代に満足に食べられない子どもがいるのである。

子どもが輝く未来に向けたシンポジウムでパネリストをしていた今西モト子氏は「支援を必要とする子どもの子ども食堂への参加をただ待つのではなく、嫌がられても首を突っ込み直接訪問して、SOSを発信している子どもと子ども食堂をつなげている」と語られた。子どもを救いたい人もいることが子ども食堂の存続に関わると思う。

子ども食堂は概ね子どもなら無料か安く食事ができる。食事だけでなく、スタッフが食事を準備している間は各自遊んだり、ボランティアと工作したり卓球したり輪投げをしたりしており、彼らのれっきとした居場所を提供できている。

高浜市の子ども食堂を手伝った際、元保護司の方にとっても興味深い話を聞いた。その方は高浜市の軽犯罪を起こした子を面倒見てきた人であるが、「子どもは悪くない。親が子をほったらかしにしているから、万引きや金を盗むという行動に走る。もちろん犯罪だから罪償わなければならないし、反省もしなくてはならない。でも一番反省すべきは親だ。」と語った。

確かに問題行動を起こす子どもの家庭では親との時間はないに等しいだろう。その放置が原因で問題行動を起こす。ただでさえ資金繰りで悩みの多い親が問題行動を起こす我が子に対してストレスを感じないはずがない。そのため虐待などの問題が発生し、保護司の出番になるのである。親の意識が子どもに与える影響は計り知れないと元保護司は言う。その元保護司は保護した腹ペコのその子のためにあらゆる手を尽くし、行政や地域団体と手を組んで子ども食堂を立ち上げた。この子ども食堂のおかげで保護司の仕事が減少すれば子ども食堂の意味もある。

その子ども食堂も子どもは無料で、特に来るための資格や取り決めもなく参加できる。何より給食以外であたたかい食事ができるのが良い。そして孤食からも救われる。みんなでわいわい会話を楽しみながら食べることも大切だ。これだけ子ども食堂が増えるのには必要性があるのだろうが、問題もある。子ども達がボランティアや世話役の大人に暴言を吐く、物を乱暴に扱う、挨拶をしないなど。そんな態度もこの子ども食堂で改めていき、社会に出た時に困らないようにできたら良いのではないか。地域の人と接し、厳しい家庭での生活だけではなく手を差し伸べてくれる人とマナーや優しさなどに触れ、人として成長し、悪事に手を染めなくなる。そして、この支援を受けた子どもたちが子ども食堂に関わり、ここへ来る子達の面倒を見て、悩みや問題を行政にあげ福祉につながれば住みよいまちづくりの一步、子ども達の貧困対策が進む未来になると考える。

子ども食堂が子どもを育てる機関になるかもしれない。地域の力と地域が育てた子ども達で次世代の子どもを助ける手伝いができると思う。行政、福祉の働きを待つよりは今西モト子氏の言うとおりに首を突っ込んでいく。その力が行政、福祉へ届くと良いと考える。

おわりに

子どもの貧困とは言え、家庭が貧困である理由はまともに稼げない親にあり、子ども自身に非はないと考え、親への支援という視点でこの問題について考えてきた。実際、データでも示した通り、親の子どもに対する教育水準はその最終学歴によって結果が大きく異なった。大学院卒の高学歴の親は自立性の高い、柔軟にものを考えられる子に育

ってほしいと望んでいるのに対し、低学歴の親は言うことをよく聞く従順な子に育ててほしいと感じている割合が高かった。これは子どもにそのように育ててほしいと願うばかりでなく、親自身がこれまでそういった教育水準で育ってきたため、子どもにもそれを強要しているのではないかと推測する。低学歴の親自身は想像力が足りておらず、柔軟な考え方ができないため、子にも同じような教育をしてしまうのではないか。そうだとしたら、鳴沢由紀子氏が言っていた「悩めない親」の説明ができる。このような支援があると情報を伝え、手を差し伸べても手続きしないのにはそもそもそれを理解し、利用する学力を持ち合わせていないからではないだろうか。諦めてしまうのはわからないからではないだろうか。

また、親の学歴が低いという事は高確率で良い職業・安定した職業には就けておらず、収入が低くなってしまう傾向にある。親の収入とその子どもの学力には明確な関係性が見られ、高収入世帯の子どもはテストの正答率が高く、低収入世帯は低くなる。親の学歴が低い、安定した職業に就けない、貧困になる、子どもに悪影響を与える、成長した子どもまた貧困層となる、とまさに「負の連鎖」である。この負の連鎖から脱却する策として、親への支援、現金給付をした場合どのような変化が起きるのか、それは子どもの貧困問題の解決策となり得るか考えてみた。

「児童手当は、家庭における生活の安定に寄与するとともに、次代の社会を担う児童の健全な成長に資することを目的とし、中学校修了前の児童を養育している者に支給される。支給額は、所得制限額（例：夫婦・児童2人世帯の場合は年収960万円）未満の者に対して、3歳未満と、3歳から小学生の第3子以降については児童1人当たり月額15,000円、3歳から小学生の第1子・第2子と、中学生については児童1人当たり月額10,000円、所得制限額以上の者に対しては、特例給付として児童1人当たり月額5,000円である。」（内閣府子ども・子育て白書平成30年版）というものが現在の児童手当制度である。しかし、日本の社会制度は、各制度に個人の損得論で議論される傾向にあり、また自分に直接関係のない制度に無関心である。そのような状態では、貧困家庭にある家族でさえも現金給付制度を自分には関係のないものとして切り捨ててしまうかもしれない。

やはり、一章でも述べた通り親への支援を待っているだけでは子どもの貧困問題を解決することはできない。子ども自身にも支援の手を差し伸べ、親と子の両側面から支えてやるのが1番の手ではないか。そして、子ども食堂にはそれを実現できる可能性があると考えられる。無料または低額で食事にありつけることは、貧困家庭にとってとてもありがたいことだろう。食費を大幅に削減できるため収入の少ない親の支えとなる。また、親にかまってもらえず家に居場所のない子どもにとって、第二の家のような役割を果たすことも可能だ。子ども食堂には食堂を運営している大人や、ボランティアの学生、同年代の友達など多くの人が集まるため、さまざまな考えに触れることができ、そこでの生活は刺激的なものとなり、コミュニケーション能力も養われるだろう。それらに加え、学習支援を行っている団体もあるため、そこで勉強をすることができ、学力向上の手助けをもできる。

子ども食堂に参加することでこれらのさまざまな恩恵が受けられ、子どもの成長を促し、見守ることができる。子ども食堂の活動は子どもの貧困対策として画期的である。しかし、子ども食堂の開催日数はせいぜい月に一、二回程度であり、これを子どもの貧



困対策とするには頼りない部分がある。そのため、子ども食堂は子どもの貧困を少しでも緩和するための一つ的手段として利用し、子どもの貧困対策にはまったく別の角度から支援を行うことが必要となるだろう。そこで、今回このレポートの趣旨である「親の支援」の制度をさらに拡充させることがこの社会問題解決の糸口となると考える。

#### 参考文献

武川正吾 「いまなぜ、子どもの貧困か」

阿部彩 『子どもの貧困Ⅱ－解決策を考える』岩波新書

ロバート・D・パットナム 『われらの子ども』

「子どもが輝く未来に向けたシンポジウム」

内閣府子ども・子育て白書平成30年版

## 第 25・27・28 回 『すこやかサタディ』

### 子ども食堂紹介



- ◎場所:地域共生型福祉施設あつぽ (高浜市田戸町三丁目 8 番地 21)
- ◎とき:毎月第 2、第 4 土曜日
- ◎参加費:子ども無料、大人 300 円
- ◎開催時間:16 時～19 時頃

第 25 回 4 月 14 日 (参加人数 : 子ども 24 人、大人 13 人)

#### ◎メニュー



- ・親子丼
- ・味噌汁
- ・唐揚げ
- ・葱坊主天ぷら
- ・キンカン甘露煮
- ・キュウリの漬物



#### ◎感想

すこやかサタディでは、食事支援をしてくださる団体が多くいる。この日は JA 高取産直さんから頂いた葱坊主を天ぷらにし、マリオン高浜店さんから頂いたお菓子を袋に詰め、配った。

子どもたちがおいしそうに食事をし、たくさんおかわりをしている姿を見て、お手伝いできてよかったと感じた。



第 27 回 5 月 12 日（参加人数：子ども 22 人、大人 41 人）

◎メニュー



- ・お稲荷
- ・ポテトサラダ
- ・黒米押し寿司
- ・スナップえんどう炒め
- ・キュウリの酢の物
- ・味噌汁

◎感想

この日はすこやかサタディ 1 周年であり、市長をはじめ福祉部長、調理ボランティアの方々など、多くの関係者が子どもたちと一緒に食事をした。しかし、想定よりも多く人が集まったため、料理が危うく不足するところだった。

第 28 回 5 月 26 日（参加人数：子ども 26 人、大人 11 人）

◎メニュー



- ・カレーライス
- ・ポテトサラダ
- ・オレンジサラダ
- ・手作りケーキ

◎感想

この三日間とも、私が子どもたちに配るお菓子を袋に詰める作業を行った。寄付されるお菓子は様々な種類があり、また数も不揃いなため均等な量詰めることに苦勞した。

また、二か月にわたりすこやかサタディに参加させてもらったところ、この食堂に来る子どもたちはわりと年齢層が高いことに気が付いた。各自で料理を運ぶことがこのやり方だが、年齢層が高いからか、しっかりとした子が多く自主的に手伝っている姿を見て感心した。



## 第14回『子ども食堂はるたま』

### 子ども食堂紹介



- ◎場所:石浜区民館
- ◎とき:毎月第三金曜
- ◎参加費:子ども 200 円、大人 300 円
- ◎参加日:平成 30 年 6 月 15 日
- ◎参加人数 : 子ども 110 人、大人 30 人

### 当日の流れ

- 14:00～ スタート
- 15:30～ 子ども達が集まってくる
- 16:00～ あそび「ちいさなおうちづくり」スタート
- 18:00～ 夕食
- 19:00～20:00 保護者のお迎え

### あそび「ちいさなおうちづくり」



地域のおじさんが材料を用意し、遊びを提供してくれている。この日は木を切ってつくった家や車を切り株の上に乗せて、ちいさなおうちを作っていた。この作業を一緒に行ったことによって、すぐに子どもたちと打ち解けることができた。

献立メニュー

◎あいとんカツカレー

◎びわとお肉のサラダ

◎フルーチェ

寄付された食材はとんかつとびわで、とても豪華で美味しかった。だか、子どもたちがとても多く来たため、おかわりができない状況だった。



まとめ

なぜこんなに子どもたちが集まるのか聞いたところ、小学校でプリントを配るなどして宣伝しており、子どもたちが友達同士で来てくれるから、とのことだった。多くの子が気軽

に来てくれることはいいことだが、その反面、どの子が貧困で悩んでいるのかわからなくなってしまっている。この問題をどのように解決していくか、いま悩んでいるようだ。

この食堂は受付のとき、シールが渡され、そこに名前を書き胸元に貼っていた。私も名前シールを胸元に貼り 1 日を過ごしたが、子どもたちを名前で呼べるうえ、自分も名前で呼んでもらえたため、すぐに打ち解け、仲良くなれた。名前シールはこの食堂のとても良い点だなと感じた。

また、運営が地域の方たちということもあって、とてもアットホームな温かい雰囲気食堂であった。



## すこやかサタディ



### 子ども食堂紹介

◎場所：地域共生型福祉施設あっぽ（高浜市田戸町三丁目 8 番地 21）

◎とき：毎月第 2、第 4 土曜日

◎参加費：子ども無料、大人 300 円

◎開催時間：16 時～19 時頃

◎参加日：平成 30 年 12 月 22 日(土)

◎参加者：子ども 25 名

大人 13 名（まち協 3 名、アスクネット 5 名、行政 1 名、ボランティア 4 名）

### 献立メニュー



- ・ツナコロッケ、キャベツとブロッコリー添え
- ・イモ天
- ・白菜とベーコンの中華スープ
- ・切り干し大根の煮物
- ・ミニケーキ
- ・ごはん

## 子ども食堂はるたま



### 子ども食堂紹介

◎場所:石浜区民館

◎とき:毎月第三金曜

◎参加費:子ども 200 円、大人 300 円

◎参加日:平成 30 年 12 月 21 日 (金)

◎参加人数:子ども 70 人、大人 6 人、ボランティア 15 人

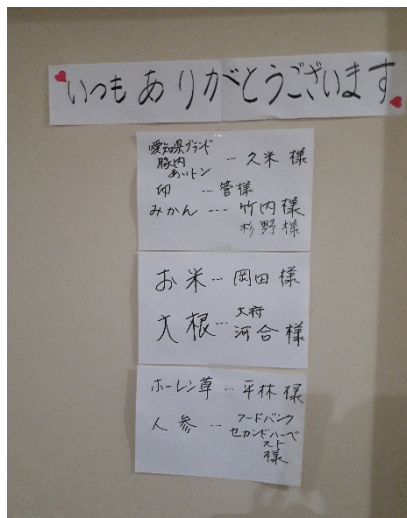
### 当日の流れ

- ・ 14 : 00 オープン
- ・ 14 : 30 子ども達集まってくる
- ・ 15 : 00 工作「クリスマス工作」
- ・ 17 : 00 受付終了、片付け
- ・ 17 : 45 ごはん
- ・ 18 : 30 クリスマス会 (読み聞かせ、クレイジーバンド、サンタさん)
- ・ 19 : 00 解散

献立メニュー



- ・あいとん入りおでん
- ・ほうれん草ともやしのお浸し
- ・トロピカルフルーツ
- ・みかん



↑ 食事の提供に協力してくださった方

工作、クリスマス会



↑ クレイジーバンド

大学1年生の3人組。

メンバーのおばあさんがよく子ども食堂はるたまの

お手伝いをしている。

子どもたちにクリスマスソングの歌詞カードを配り、一緒に歌ってもらう参加型の演奏を披露し、とても盛り上がっていた。



↑ 工作作品